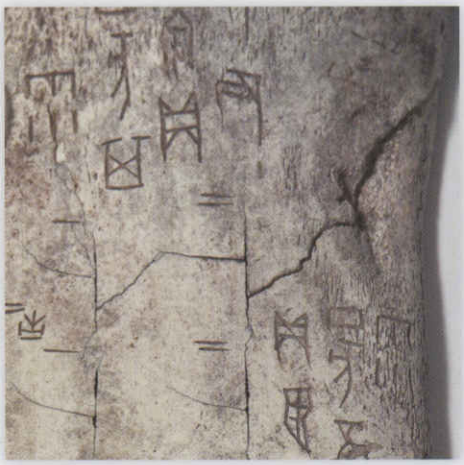
漢字の書体の変遷

中国で生まれた文字である漢字。
その3千年以上に及ぶ歴史の中で、
より機能的に、より美しく書く工夫がなされて発展し、
篆書、隷書、草書、行書、楷書の五つの書体が生まれました。

【略　年　表】

紀元	25	8	前202	前221	前403 戦国時代 前770 春秋時代			
中国	後漢	新	前漢	秦	東周		西周	殷
日本	弥生時代		縄文時代					



甲骨文
牛の肩甲骨に刻された甲骨文。これは降雨を占ったもので、庚辰の日に、丁亥の日には雨が降るか、降らないか、を占っている記録。／殷時代（前13～11世紀頃）台東区立書道博物館蔵

「篆書」

現存する最古の漢字とされるのは殷時代の「甲骨文」で、亀の甲羅や動物の骨などに占いの記録が刻まれています。

それに続く西周、春秋戦国時代の「金文」は、祭祀に用いる青銅器に鋳込まれた銘文の文字です。このほか、竹簡や絹布などに書かれた肉筆文字など、時代や用途により多様な文字がありました。

そして紀元前三世紀、秦の始皇帝が中国全土を統一後、文字の統一を図り、「小篆」と呼ばれる正式書体を確立しました。左右の均整がとれた、やや縦長の字形が特徴的です。この小篆とともに、戦国時代の石鼓文に見られる大篆を総称して「篆書」と呼びます。

素朴でやや複雑な点画、優れた造形感覚にあふれた篆書は、今なお実印や雅印などの書体として活躍しています。

金文
小克鼎。下部に3本の足を持つ青銅器の器で、内側に文字が鋳込まれている。克という人物が周王の命を受けた任務を果たしたことを記念して制作したもの。／西周時代中期（前10～9世紀頃）台東区立書道博物館蔵

「隷書」

隷書は、篆書の点画が簡略化されて生まれた書体です。

字形が横長で、横画や右払いなどに美しい波磔（うねりを帯びて、はね上げるように抜いていく筆法）をもちます。これを「八分」と呼び、後漢時代にこの様式が公用の書体として用いられるようになりました。

毛筆の特性が生かされた、威厳や安定感のある書体で、現代では書籍の題字や紙幣の文字などに見ることができます。

「草書」「行書」「楷書」

時代が進むにつれ、文字の簡略化はさらに進み、隷書から草書、行書、楷書へと発展していきます。隷書が公用書体であった漢時代でも、日常的用途には隷書の速書きによる省略体、草書が多く使われていたようです。

その形や筆勢に工夫が加えられ、現在のような草書が完成したのは東晋時代。時に応じてさまざまに変化する動態の字形で、筆運びは流動的でありながら、きっぱりした鋭さを併せ持つのが、草書の特徴です。

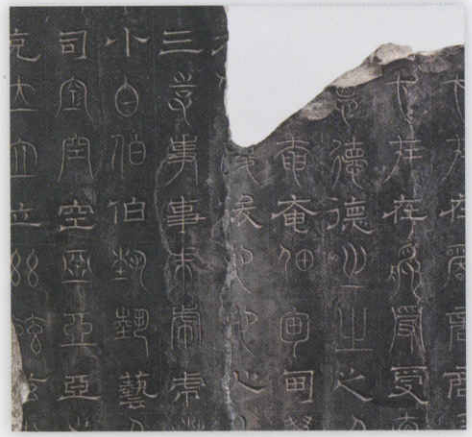
行書も隷書の点画を簡略化し、やや速書きしたなかから生まれた書体です。楷書の発生とほぼ同じ時期に、実用的な書体として定着しました。

草書より読みやすく、楷書より速く書くのに適する行書の特徴は、リズムと抑揚のある筆運び、柔らかさのある点画、連続や省略される点画などです。

楷書は、五書体のなかで最も遅れて成立した書体です。一点一画を明瞭に書き、一つの点画を三折（起筆、送筆、収筆）の筆づかいで書くことが特徴です。

三国時代（魏・呉・蜀）から西晋時代には、楷・行・草の三体が成立し、現代に至ります。

〈書体の変遷図〉（例・「天」）



古文、小篆、隷書

三体石経残石。儒教の経典を石に刻した石経。同じ文字が、古文（春秋戦国時代ごろ中国東部で使用された文字）、小篆、隷書の三体で刻まれている。／三国（魏）・正始年間（240～248）　台東区立書道博物館蔵